

『学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』の刊行について

年史編纂室

記念誌刊行の経緯

関西大学では、二〇二二年の大学昇格一〇〇年を記念して、『学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』（二〇二二年六月五日

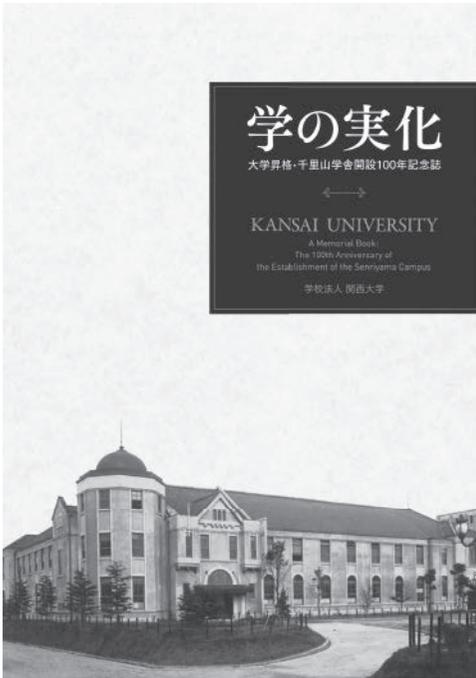


図1 記念誌『学の実化』（表紙）

発行、A5判、三七五ページ）を刊行した。本書は、新出の山岡家文書や年史編纂室が所蔵する資料を活用し、大学昇格期の内容を中心とした書下ろしの記念誌となった。

二〇一六年の大学創立一三〇周年記念事業が終了し、年史編纂室が次の大きな節目となる大学昇格一〇〇年に向けて検討を始めたのは、二〇一七年の夏ごろからであった。創立一三〇周年記念事業では、写真集『関西大学130年のあゆみ』と併設校向けの副読本『関西大学をまなぶ』の二冊を刊行したばかりであった。そのため当初は、年史編纂室と博物館で記念展示会を開催し、充実した展覧会図録を編纂するのはどうかといった内容が中心となっていた。

二〇一七年末になり、当時の理事長から、関西大学が大学昇格一〇〇年を迎えるにあたり、年史編纂委員会において、記念誌の刊行について検討してほしい旨の要請があった。これを受けて、二〇一八年度第一回年史編纂委員会（五月二十八日開催）において審議し、記念誌の刊行と、記念誌の編集方針やデザイン等を検討するため、小委員会の設置が了承され、大学昇格一〇〇年記念誌の編纂がスタートした。

委員会について

関西大学では、年史編纂に関する資料収集、整理及び活用等に関する業務を推進するため、関西大学年史編纂委員会（以下、年史編纂委員会）が置かれている。実際の記念誌の編纂にあたっては、年史編纂委員会のもとに、編集方針の策定、原稿執筆とその検討等を行う小委員会を設置し、小委員会が実質的に記念誌の編纂活動を担っている。小委員会は、年史編纂委員会の副委員長が小委員会委員長となり、年史編纂委員会委員から若干名を小委員会委員として選出する。

今回の記念誌でも、既刊の年史編纂時と同じように小委員会が設置され、叙述の中心が大学昇格期の関西大学となることから、旧制大学期で設置されていた法学部、文学部、経済学部、商学部から選出の委員と、キャンパスの変遷に造詣が深い環境都市工学部選出の委員を小委員会委員に選出した。

小委員会を取りまとめた案は、年史編纂委員会で審議・検討を行い、了承を得るという手続きをとり、年史編纂委員会で出された意見は、さらに小委員会で検討し、編纂作業に反映させた。記念誌刊行までに小委員会は十一回、年史編纂委員会は九回開催し、開催日時と各回の主な審議・検討事項は一覧の通りである。

今回の記念誌編纂に関する委員会と小委員会は、二〇二〇年一月以降の新型コロナウイルス感染症の流行のため、通常の対面開催ができなかった期間は、書面での持ち回り委員会やZoomによるオンラインの委員会として実施した。

2018年度	第1回年史編纂委員会	2018年5月28日	記念誌の刊行に向けた小委員会の設置を了承	対面
	小委員会（第1回）	10月22日	編集方針の検討	対面
	第2回年史編纂委員会	11月19日	進捗状況の報告	対面
	小委員会（第2回）	11月26日	編集方針、タイトル案の検討	対面
2019年度	第1回年史編纂委員会	2019年5月27日	編集方針、タイトル案の了承	対面
	小委員会（第3回）	7月17日	目次案の検討	対面
	小委員会（第4回）	10月30日	目次案の検討、執筆分担案の検討	対面
	第2回年史編纂委員会	11月25日	目次案の了承	対面
2020年度	第1回年史編纂委員会	2020年6月1日	進捗状況の報告	持ち回り
	小委員会（第5回）	7月20日	目次修正案の検討、執筆分担の検討、原稿案の検討	オンライン
	第2回年史編纂委員会	12月1日	原稿案の了承、進捗状況の報告	持ち回り
	小委員会（第6回）	2021年1月21日	原稿案の検討、編集業務委託の検討	オンライン
	小委員会（第7回）	3月1日	原稿案の検討、編集業務委託業者の検討	対面
2021年度	小委員会（第8回）	2021年5月17日	目次見直し案の検討、記念誌体裁の検討	オンライン
	第1回年史編纂委員会	6月1日	編集業務委託の了承、目次見直し案の了承、原稿案の了承	持ち回り
	小委員会（第9回）	9月16日	ブックデザイン案の検討、原稿案の検討	オンライン
	小委員会（第10回）	10月20日	ブックデザイン案の検討、原稿案の検討	対面
	第2回年史編纂委員会	12月1日	ブックデザイン案の了承、原稿案の了承	持ち回り
	小委員会（第11回）	2022年1月25日	原稿案（全ページ）の検討	オンライン
	第3回年史編纂委員会	3月25日	原稿案（全ページ）の了承	オンライン

図2 委員会の開催状況

記念誌の編纂過程

一、編集方針

記念誌の編集方針は、小委員会では二〇一八年度に検討した。通史的な内容とするか、既刊の「あゆみ」のような写真集とするか、叙述範囲は創立からとするか、大学昇格期とするか、昇格から現在までの一〇〇年とするか、などが議論された。また、関西大学が法律の専門学校から大学へ昇格するにあたっては、大阪財界の重鎮であった山岡順太郎の尽力が大きかったことから、山岡順太郎の業績を明らかにすることや、関西大学が大学に昇格した時期は、大阪が「大大阪」と呼ばれた時代であったことから、関西大学と大阪経済界との関わりを解き明かすことも課題であると指摘されていた。最終的には、次の四点を大きな編集方針として、小委員会から年史編纂委員会へ提案し、二〇一九年度第一回年史編纂委員会（五月二十七日開催）で審議・了承された。

①タイトル案「学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100周年記念誌」

②文章を中心とした通史的な記述で、別に資料編を設ける

③コラムや個別のエピソードを集めた特論のような部分を設ける

④叙述範囲は、昇格前後から予科校舎竣工ごろまでとする

①のタイトルは、今回の記念事業の名称が「大学昇格100年事業」であったため、後に事業名にあわせて「昇格100年記念誌」と変更した。

②に関しては、既刊の『関西大学七十年史』『関西大学百年史』『関

西大学百二十年史』では、大学昇格期については詳しい検討ができていないため、これを機会に詳細な調査・検討を行いたいとの意見があり、「あゆみ」のような写真集とはせず、通史的な内容の記念誌とした。

④の叙述範囲は、大学昇格期に焦点を当て、大学に昇格した一九二二年前後から、新予科校舎が竣工した一九三六ごろまでとした。新予科校舎は、千里山学舎最初の校舎である予科校舎（一九二二年竣工）が一九三四年に焼失したことにより一九三六年に新設され、この新予科校舎の竣工で、旧制大学期のキャンパス景観がほぼ確定するので、この年を叙述の下限の目安とした。

二、目次

記念誌の目次案は、『関西大学百年史』上巻の大学昇格期に関する事項の目次を参考に取りまとめ、次の全十一章とした。各章の分量も、『関西大学百年史』で該当する記述部分の割合に応じて設定し、執筆分担を検討した。

第一章 千里山前夜

第二章 大学昇格の機運

第三章 校地の選定と取得

第四章 山岡順太郎の登場

第五章 「大学設立認可申請書」と大学昇格の実現

第六章 「学の実化」の提唱と展開

第七章 学舎の充実

第八章 教育の新展開

第九章 昭和二年の紛擾事件

第十章 千里山黎明期の課外活動

第十一章 キャンパスの拡大と充実

叙述の中心は大学昇格期であるが、第一章は導入部分として創立と専門学校時代の関西大学を概観し、また最終章の第十一章は、一九四八年に新制大学へ移行したあとのキャンパス整備と学部・学科の変遷を概観し、現在の関西大学へとつながる章とした。小委員会から提案した目次案は、原稿執筆の進捗による修正があることを含めて二〇一九年度第二回年史編纂委員会（十一月二十五日開催）で了承された。

三、編集者・ブックデザイナーへの業務委託

二〇二〇年度からは、目次案により原稿執筆が本格化し、小委員会では原稿案の検討が続いたが、その過程で、大学昇格一〇〇年に相応しいデザインと、見やすさ読みやすさを兼ね備えた記念誌にしたいとの考えから、外部の編集者やブックデザイナーに編纂業務の一部を委託することが議題となった。そこで、本学出版部出版課の協力を得て、企業や自治体の周年記念誌の編纂実績のある人選を進めた。今回の記念誌では、編集者、ブックデザイナー、校正者を依頼して、表紙・口絵・本文ページのデザイン、図版トレース、画像処理、原稿整理、校正、組版までの作業を委託し、印刷用データを作成することとした。この案は、二〇二〇年度末から開催の小委員会で検討を重ね、二〇二一年度第一回年史編纂委員会（六月一日開催）に提案し、審議・了承を得た。

編纂業務等の外部委託の了承を得たことから、小委員会では、他大

学を含む既刊の年史類を参照しつつ、おおまかなイメージを提示して、ブックデザイナーにページデザインの提出を求めた。提案されたデザイン案はおおむね好評で、若干の修正をしてデザイン案を確定した。小委員会でデザイン案の検討を進めるなかで、デザイナーから提案があった細身のフォントではなく、今日のSDGsの考えに基づき、可読性に優れたUDフォントを採用したことが大きな変更点であった。記念誌のブックデザインについては、二〇二一年度第二回委員会（十二月一日開催）で審議・了承された。

四、入稿から印刷、発行まで

ブックデザインが決まり、二〇二一年十二月上旬から、年史編纂委員会です承された記念誌本文の原稿と、事務局で準備した資料編（大



図3 章扉のデザイン

ヴァンヌーボーFIFS（ホワイト）、四六判Y目一三五kg、プロセス四色印刷、艶有りニス加工

・表紙

タント（N七）、四六判Y目一八〇kg、特色一色印刷、加工無し

・見返し

ピオトープGAIFS（マゼランブルー）、四六Y目判九〇kg

・本扉

ネオラップ（ホワイト）、ハトロン判T目九二kg、特色一色印刷

・本文

淡クリームこはく、A判四六・五kg、三七六ページジニニ一八八枚

×〇・一〇四一四一九・五五二ミリ

・口絵

ニューVマット、A判五七・五kg、〇・一〇八×四二〇・二一

六ミリ

新しい資料の活用

一、山岡家文書

記念誌『学の実化 大学昇格・千里山学会開設100年記念誌』は、大学昇格期に焦点を当てることから、特に山岡総理事については、既刊の『関西大学百年史』に記された以上の内容を盛り込むことを心掛けた。

年史編纂室では、これまでの展示会で展示資料として、山岡家から山岡順太郎の日記、辞令書、書簡、写真等を何度か借用していた。今回の記念誌編纂では、改めて日記や辞令書等を借用し、編纂資料とし

て全点の複製物の作製をご快諾いただき、二〇二〇年度に写真撮影を行った。二〇二一年三月の資料返却時に、蔵に大量のものがあることをご教示いただいた。そこで、山岡順太郎や関西大学に関する資料の有無について確認いただいていたところ、後日、「関大関係」と上書きのある手紙や資料が入った封筒があるとご連絡があった。これを受けて、年史編纂室員三名が二〇二二年四月十九日に資料調査を行い、二〇〇〇点を超す新出資料を確認し、借用することができた。

年史編纂室では、まず資料全体の概要確認を行い、新出の山岡家文書は、山岡順太郎に関する資料のほか、山岡順太郎の父である山岡美章関係資料や長男の山岡倭関係資料からなることが判明した。そこで、本資料を記念誌の編纂資料として活用するため、まず、山岡順太郎に関する資料の内容確認を優先して行った。その結果、関西大学関係資料、山岡順太郎が経営に関わった会社関係資料、自筆の掛け軸、大量の書状、写真が含まれていることが分かった。関西大学関係資料からは、関西大学学歌の歌詞の推敲過程が分かる服部嘉香の書状や、宮島綱男が関西大学を辞職するきっかけとなった昭和二年の紛擾事件の一括資料等の新出資料が見つかり、その内容と調査の成果は記念誌に反映することができた。

二、年史所蔵資料の再調査

記念誌執筆の資料とするため、山岡家文書の調査のほかに、年史編纂室が所蔵する大学昇格期の資料の精査も行った。その結果、古い会計帳簿群に「寄附割当台帳」「毎月払寄附金明細帳」「一時払 毎六ヶ月払寄附金明細帳」「寄附金通計簿」「後援会寄附金明細帳」の簿冊が

あり、これらが大学昇格のための寄付金募集活動に関する帳簿であることが分かった。これらの簿冊は写真撮影を行い、年史編纂室員で手分けして「寄付者名」「肩書」「寄付金額」「寄付年月日」等を一覧表に入力した。データ化したことで、寄付金額の集計や人名検索等での活用が可能となった。

また、年史所蔵の「大学設立認可申請書」の控二冊や「京阪土地に関する文書」等の大学昇格期の大学公文書も写真撮影を行い、小委員会写真データを共有し、詳細な検討を行った。「大学設立認可申請書」の比較、検討から、二冊のうちの一冊には文部省との往復文書が綴られていて、大学昇格の条件を満たすために、文部省からの指示により関西大学がとった様々な措置を明らかにすることができ、「京阪土地に関する文書」からは、一九二六年に完成した大運動場の用地取得の経過が分かった。その他、年史編纂室が所蔵する、明治・大正の「学制一覧」や旧制大学期の「学則」「大学一覧」、旧制大学期の学生新聞〔関西大学新聞〕〔天六関西大学新聞〕〔関西大学学生新聞〕〔関西大学学友新聞〕もデータ化（JPEIG・PDF）を行い、これらは、年史編纂室のホームページ（年史関係資料）に掲載することで、データの共有をはかった。これらの資料から明らかとなった事項も、記念誌の随所に反映している。

これとは別に、年史編纂室では、過去の年史編纂事業により、ネガフィルム、ポジフィルム、プリント写真を大量に所蔵しているが、今後の年史編纂事業を見据えて、毎年予算を確保しデータ化を進めている。データ化できた資料からは、これまでよく利用する写真とは別のアングルの学舎写真が見つかり、記念誌だけでなく、記念展示会での

パネル作成や、昇格当時の千里山キャンパス模型作成の資料として活用することができた。さらに、学内刊行物（『千里山学報』〔関西大学学報〕〔関西大学新聞〕等）を切り抜き分類した資料も、「分類」「タイトル」「掲載紙（誌）」「発行年月日」「掲載ページ」のデータ化（一覧表入力）を進めていたことから、資料検索に大いに役立った。

おわりに

記念誌『学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』は、年史編纂委員会が中心となり、執筆は小委員会委員と年史編纂室員が担当したこと、編纂業務の一部を外部編集者とブックデザイナーへ委託し、編集やデザインの提案を受けたこと、新出の山岡家文書は内容確認の作業と並行して記念誌執筆の資料として活用したこと、これまで不十分であった年史編纂室所蔵資料の活用をはかったことなどが大きな特色となった。新たな資料の活用によって、山岡順太郎の業績や関西大学の大学昇格に向けた取り組みの解明を進めることができた。ただ、十分に活用できなかったのが財務関係の資料であった。一九一〇年代からの予算・決算に関わる資料が残されており、専門学校時代と大学に昇格してからの財務構造や規模の変化、現在との比較など、関西大学の財政のあゆみを明らかにすることは、今後の周年記念誌編纂にむけた課題の一つである。

記念誌『学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』の編纂がきっかけで発見につながった山岡家文書は、年史編纂委員会委員である官田光史文学部准教授が代表となり、関西大学ならびに大阪研究センターの公募研究「『大大阪』の時代と関西大学―山岡家文書の

「調査・研究を中心に―」に採択（二〇二二～二〇二三年度）され、調査・研究が進められている。年史編纂室でも、官田准教授のご協力を得ながら、目録の刊行を目指して資料の整理を継続している。山岡家文書の全体像が明らかになった時には、山岡順太郎の事績と関西大学のあゆみについて、記念誌『学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』に記した以上の新しい発見があると思われる。将来の年史編纂事業に向けて、山岡家文書をはじめとする年史資料がよりよい状態で保存・継承され、年史関係の情報が着実に蓄積するよう努めたい。

（年史編纂室 伊藤信明）